

パリ発ロシア文学と『武蔵野』
-あるロシア・ジェンヌの回想-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 春子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22355

パリ発ロシア文学と『武蔵野』

—あるロシア・ジェンヌの回想—

杉 山 春 子

文学は言葉だけで成り立つ世界だけれど、言葉の力はどれほどのものなのか。「近さと遠さ」を考えると、ツルゲーネフを思い出す。彼の作品には、遠い時空を超える不思議な力があつた。

一八八三年一〇月一日パリ北駅。ツルゲーネフの棺の前に壮大な告別式が、ロシア人、フランス人、ドイツ人、イギリス人からなる数万人の群衆に見守られるなか、厳かに行われた。ロシア正教会の主教の祈りとロシア語、フランス語の弔辞が続いた。ロシア人だけでも、エドモンド・ゴンクールが記したように「まさに一個のロシア、この首都にこれほど住んでおられようとは」というほど

だった。棺をのせた汽車はベテルブルクに発った。

ツルゲーネフは主にパリで書いた。彼の文学者としての方向性を決定づけた『獵人日記』もそうだった。帝政ロシアの民衆、特に、農奴たちの人間としての姿を精緻な観察と豊かな筆力で余すところなく描いたこの作品は、ロシアやヨーロッパ、そして日本でも大いに愛された。ツルゲーネフという苗字がタタール民族に遡り、彼の顔立ちにその面影が漂うのは極東地域にご縁があるようである。さて、知る人ぞ知る『あひびき』を思い起そう。二葉亭四迷（くたばってしめえ！）は死ぬほど、——なしる、天性の詩人ツルゲーネフの作品だ——苦心惨憺

して、いわゆる「言文一致」の翻訳を世に問うた。そのちよūdō一〇年後、独歩の『武蔵野』に、まるで「叙景美のお手本」と言わんばかりに堂々、たっぷり引用された。そうこうしているうちに、蘆花は本家本元の「武蔵野」に赴く。ロシア文学の二大巨匠ツルゲーネフとトルストイは、穏やかな気候と豊かな自然に恵まれた中部ロシアの大地主貴族で隣同士だった。

母国語と離れた空間に居ると作家は息苦しきを感じる、ということがあるらしい。しかし、ツルゲーネフにそれはなかった。用事があるとロシアに赴いたものの、むしろ国外で诗情豊かな作品をロシア語で書き続け、言葉の充電度、芸術性はいつも高水準だった。彼は心底憎んだ農奴制社会のなかにいるより、パリのほうが思いっきり創作することができた。フランス語で「視界から遠いと、心に遠くなる」という格言があるけれど、その逆も然り。「視界から遠いと、心に近くなる」ということもあるようだ。天衣無縫ともいうべき完璧な叙景の美を『獵人日記』の『森と廣野』から引いてみよう。

いよいよ心ひかれぬ、

かの村の暗き園生に、

菩提樹の大樹おおきの影の暗くして、

鈴蘭の花、清らにもかぐわしく、

円き柳、堤より水の上に、

つらなり垂れて、

ゆたかなる榭かじ、ゆたかなる畑に生い立ち、

大麻やいらくさのおおるところ、

思おもい寄す、かの村の広き大野に

びろうどのごと、地は黒々と

見渡す限り、ライ麦の静かにも

軽きうねりを寄せかえし、

円らかに白く透かきいる雲間より、

重たくも黄色おうじきの光ひかりの落つるところ、

かの村なれば、何もかもよき……

(中山省三郎訳)

このようにパリで書くことに何の不自由もなく、言葉の壁というものはそもそも存在していなかった。というのも、ロシア貴族の家庭では子供の教育をフランス人やドイツ人の家庭教師に任せる習慣があった。そのうえ、ツルゲーネフは幼少時からフランス語、ドイツ語、ロシ

ア語で日記を書かされるなど、さまざまな英才教育を受けていた。一五才でモスクワ大学言語学部に入學、その翌年、さらに難関のペテルブルク大学言語哲学科に編入し一八才で卒業後、ベルリン大学に留學して哲学修士の学位を取得した。古典古代からのヨーロッパの言語芸術に精通し、ロシア語のほかに、フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、スペイン語で自由に話すツルゲーネフは、第一級の知識人として迎えられたのである。ジョルジュ・サンドと意気投合し、親友フローベール、ゾラ、ドーデ、エドモンド・ゴンクールとの月例「五人の会」——後にモーパッサンが仲間入りする——では晩餐と文學談義を思う存分楽しんだ。ユーゴーが議長を務めた国際文學者会議では副議長を任されたが、これも彼の力量からしてごく自然なことだった。

それにしても、なぜツルゲーネフは異郷での著述を選んだのだろうか。ほとんどの文學史や伝記ではパリに住む歌姫、恋人ヴィアルドー夫人を理由とするのみである。ツルゲーネフという人間にとってそれは確かに必要なことだった。だが、たとえヴィアルドー夫妻の家庭に同居して一流サロンの常連となっても、無聊に苛まれること

はなかったのか。否。ツルゲーネフには使命があった。作家として生きる最大の目的は「農奴制」との闘いに勝利することだった。「より強く、徹底的に戦うために、この「敵」には遠方から全力で襲いかかる必要があった。もし、ロシアにいたら『獵人日記』は書けなかった」とツルゲーネフは一八六八年に述懐している。実際、『獵人日記』はそれほど当時の検閲の許容限度を超えた著作だったのだ。今風に言うくと、農奴制の恥部を暴露する、スキヤンダルともいえる内容であり、『あひびき』だってそうである。天性の芸術家であるツルゲーネフの作品には直接的な、過激な批判はなくとも、思想や感情は人物描写や叙景のなかに静かに織り込まれている。農奴制ロシアに対峙し勝利するために祖国を離れた、という信条告白が示すとおり、ツルゲーネフは大様で優しいだけでなく、強靱な反骨精神の持ち主だった。アレクサンドル二世がツルゲーネフに伝えてきたとおり、『獵人日記』は皇帝に農奴解放を促す決定的な要因となった。

エズラ・パウンドは「芸術家は民族のアンテナである」(『詩学』)と言ったけれど、ツルゲーネフはこの意味にぴったりの芸術家だ。『獵人日記』全二五編は、ロシア

文学史上、はじめてロシアの自然とそこで生きる人々、農奴たちの生活と心性が鋭敏な観察と限りない情愛をもって描かれた作品で、ロシア国内で大ベストセラーとなった。そのなかには、一八七〇年代にロシアで発生した飢饉に対して民衆救済のために寄付した美しい一篇もある。パリで書かれた『生き神様』（直訳は『生きている遺骸』）のことである。そのエピソードからしても、ツルゲーネフが民衆にどれほど深く優しい情愛を抱き、その運命に苦悩していたかが、伝わってくる。

永き忍苦のわが郷国よ——

ああ、露西亜の民の国！

（中山省三郎訳）

国外から体制を変えろというツルゲーネフの強い信念は、パリにおいても発揮された。祖国を離れたロシア人学生や政治亡命者のために衣食住にかかわる人道支援や私設図書館設立に尽力するなど、同胞を支援する活動もしたのである。また、興味深いことに、シベリア流刑後、パリに移住した「デカブリストの乱」（一八二五年）の首謀者たち、ニコライ・ツルゲーネフやセルゲイ・ヴォ

ルコンスキーと親交があり、旧世代のインテリゲンツィアたちとのつながりも大切にしていた。農奴解放令発布（一八六一一年）直後には彼らと共にロシア正教会で祝典を行うなど、世代や主義主張を越えた社会活動も辞さなかった。ツルゲーネフは生涯にわたり、人道主義の立ち位置からロシアとヨーロッパ社会、双方に向けて文芸ジャーナリズムからの発信を続けたのである。トルストイのフランス語訳を積極的に紹介したことや、死を目前に病床からトルストイに文学への復帰を呼びかけたことは、特筆に値するだろう。

さて、文学は言葉の壁も、時空も超えて、地球上でそれが必要とされる異国の文学にまでちゃんと着陸することもある。文学者たちの偉業、運命の不思議に感激してしまう。その国の文学界に新風を巻き起こし、新たな境目が拓かれることがある。

ツルゲーネフはヨーロッパ人にとって、それまで霧に覆われていたようなロシアの自然風土、歴史文化を紹介し、文学の翻訳出版にも尽力した。聡明で温厚な巨匠は文化大使のような役割も果たしたのだった。こうして、

ヨーロッパがロシア文学を発見してから約三〇年後、ツルゲーネフの日本語訳が待たれた。二葉亭（当時はまだ長谷川辰之助だったが、本稿では二葉亭と表記する）に白羽の矢が立つ。五才で漢学を学び七歳からフランス語を、一六才でローマ史、フランス史を学び、その後、外国語学校でロシア語を学んだ彼は、一八八六年のある日、同じ尾張藩出身で『小説神髓』の作者、坪内逍遙を訪ねた。ところが、逍遙は二葉亭が自分とは比べ物にならないほどヨーロッパ文学を味読し、ヨーロッパの文芸批評に精通していることを認めざるをえなかった（坪内逍遙『長谷川君の性格』）。然して、逍遙からツルゲーネフの翻訳を是非に、と勧められたのだった。長編『父と子』の部分訳のあと、蘇峰のすすめもあって『獵人日記』から短編『あひびき』の完訳が世に問われることになる。

二葉亭が翻訳を決心したことは甚だよろしかった。これは運命だったのか。じつは、ツルゲーネフのような知的上層エリートインテリゲンチヤの文学を読むには、フランス語、ドイツ語とそれらの文学についての教養が必要なのだ。ロシア語の知識だけではとても無理で、皮肉やユーモアが分かんなかったりする。とにかく、言葉のセンスが問題とな

る。しかも、天性の詩人の魂をもつツルゲーネフの作品はしばしば詩の韻律をとまって、詩想と音調の相乗効果が絶妙であるため、ロシア語でも文体の模倣は難しい。それを日本語で模倣して見せた二葉亭の名人気質は前代未聞だった。本人曰く、「文学に対する尊敬の念が非常に強かったので、例えばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻訳するにも同様に神聖でなければならぬ。就いては、一字一句と雖も、大切にせなければならぬやうに信じたのである」（『余が翻訳の標準』）という心構えだ。これには東京外国語学校露語学科でアメリカ国籍のロシア人、ニコライ・グレイの薫陶を受けたことが幸いした。語学の天才、二葉亭が名教師のもとでロシア文学の原典を学び、「誰も聴き惚れないものはいない」といわれたグレイの朗読から美しいロシア語の響きや音調を会得したことは想像に難くない。当時としては稀有なことである。そしてついに、原文の語数や句読点の数、さらには音調も同じにすべく惨憺たる苦心を払って、新しいスタイルの文章で『あひびき』を翻訳し文壇を驚嘆させた。一八八八年のことだった。あまりにも有名な冒頭部分を引いてみよう。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。(中略)あわくしい白雲が空ら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて伶俐し氣に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空あそらがのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。

私は二葉亭訳の『あひびき』に心地よさを覚える。ロシア語の原文と音調が同じで詩想も裏切っていないから。ロシア語の表現そのままの直訳だけれど、日本語でもリズムを感じて意味もピンとくる。ツルゲーネフが日本人になって書いたみたいだ。ロシア語の文体、音調がそっくり、そのまま日本語になっていて魔法のようだけれど、明治期の文学青年、独歩、花袋、蘆花たちも結構、気に入っていたようだ。

独歩は英文出身で詩人ワーズワースを信奉していたが、ヨーロッパ文学、ロシア文学にも関心があった。『武蔵野』はどのようにして書かれたのだろう。以前から、

『あひびき』だけでなく、他のツルゲーネフ作品の二葉亭訳も研究し、輪読会でツルゲーネフを薦める友人、今井忠治の影響を受けてツルゲーネフの世界に傾倒していたことは確かだ。また、一八九七年にはドーデの『巴里の三〇年』からツルゲーネフの章を選んで読んでいたことも興味深い。この頃、佐々木信子との恋愛が不幸な結末を迎えていたのだけれど、その苦悩から立ち直る過程で、独歩は思い出の場所「武蔵野」を自分流に描くことにする。「われは詩人たるべく今日まで独修し来れり。われは自己の道を歩むべし。われは詩人として運命づけられしことを確認す。全力を此の天職に注ぐべし。(中略)吾は此の運命を満足す。『武蔵野』はわが詩の一なり」(『欺かざるの記』)という予言どおりに。では、詩人として何に満足するつもりなのか。二葉亭の名訳によって自家葉籠中のものとなっていた『あひびき』の詩趣と深く共鳴するところがあつたに違いない。『武蔵野』にはツルゲーネフ的な文体、趣が其処に漂う。だが、それだけではない。『あひびき』からの二つの長い引用はさて、何のためなのか。しかも、最初の引用直後に「自分がかかると落葉林おちむきの趣を解するに至つたのは此この微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亞の景しかで而も林は樺かばの

木で、武蔵野の林は櫛はなの木、植物帯からいふと甚はなだ違ちがっているが落葉林の趣おもむきは同じ事である」と断り、二回目の直後にも「これは露西亞の野であるが、我武蔵野わぶの野の秋から冬にかけての光景も、凡そこんなものである」と続ける。独歩は「武蔵野」に「露西亞の景ロシア」をぐっ、ぐっ、と二回も引き寄せて見せているのである。こうして「露西亞の景」が「今の武蔵野」の景にきちんと重ねられ、古代、近世日本文学からの伝統から距離をおいたところで、独歩は落葉林のある田園風景や人々の生活のびのびと描く。ロシア人である私は「ロシアの林には櫛の木もあります。遠慮することはありませんよ」と思わず声をかけたくなるほどだ。以上のように、独歩は二葉亭ツルゲーネフの『あひびき』に棹かさして、「萱原かやはらのはてなき光景」から解放され、「落葉林の美」を描くことに成功した。ヴォルテールが「新しい思想は新しい革袋に」と言ったように、近代的な感性と意識を「今の武蔵野」に息づかせた創才は、流石としか言いようがない。『武蔵野』は独歩の近代「武蔵野」宣言であり、そこにはツルゲーネフと二葉亭が叙した「露西亞の景」が永遠に刻印された。

ところで、独歩のツルゲーネフ熱は決して一過性のものではなく、二葉亭の訳業のみに限定する必要はないのである。それは『武蔵野』執筆前に始まり、その後も独歩は有名なガーネット訳で『獵人日記』全編や『父と子』、『ルージン』、『処女地』などを、一字一句丁寧に読み込み、思想的にも接近していった。「ツルゲーネフは人生の深意を描いて見せて呉れた。——實に世界の大人だと思ふ」、「ツルゲーネフの名の下に、——人道には国境はない、詩には人種がない」(『捕虜』)という独歩の言葉にはツルゲーネフへの万感が響く。花袋の観察によれば人生の中頃から晩年にかけて、独歩の「文芸上また思想上の態度はツルゲーネフの行き方」となっていた(『インキツボ』)。余命いくばくも無い独歩が「人生の研究の結果の報告」(『予は如何にして小説家になりしか』)の執筆を決意した頃、文豪の創才はツルゲーネフを思慕していたかもしれない。『武蔵野』発表後、一〇年が経過していた。

独歩が最期を迎えた一九〇八年、二葉亭、花袋、蘆花など文士仲間が独歩慰問の文集『二十八人集』を出版した。蘆花は武蔵野の一隅、千歳村からの書簡『国木田哲夫兄

に与へて僕の近況を報ずる書』を寄稿した。武蔵野の林野を「小スケールの露西亜式」と譬えて『あひびき』の詩趣をそれとなく書簡に忍び込ませ、「自慢の甘薯でも蒸して武蔵野の秋の一夜を語らうではないか」と結んでいた。最後に、その二年前にさかのぼって蘆花がトルストイを訪れた際、車中で読んだ和歌を見ておこう。

武蔵野を斗榭で量りばら撒きて、

なほあまりある大露西亞の原 (『巡礼紀行』)

独歩の「武蔵野」が里帰りしたようなパロディが面白い。蘆花が、かの地を『武蔵野』や『獵者(スボルツマン)のスケッチ』『巡礼紀行』——『獵人日記』のこ——を思い浮かべつつ散策したことはもちろんだが、この和歌は独歩が全力で書いた落葉林の美の世界が、ツルゲーネフと二葉亭のお墨付きで新なる「武蔵野」として広く認知されていたことの証左となるだろう。伝統的な文学空間を刷新し、意識や感性に新しい境地をもたらしした独歩の創才に心からの賞賛を送りたい。

さて、いろいろ話をしてきたけれど、言葉の力はどれ

ほどのものなのか、という問いが出発点だった。言語芸術の力と言っても良いと思うが、作品の創作者と受け手の力量に深くかわる問題ではないだろうか。ツルゲーネフは創作に最良の環境をパリに定め、異郷から祖国の一般読者のみならず、皇帝の心にも届く力のある作品を発信し続けた。その一つが『獵人日記』であり『あひびき』はその一篇だった。詩人の魂をもつ巨匠の作品において言葉の充電度、芸術性はあらゆる意味で世界文学のなかでも最高水準に位置していた。これは決して誇張ではない。プーシキンの翻訳を手がけたフランスの作家、メリメにツルゲーネフの「叙景の魅力をフランス語で生み出すことは不可能であると私は信ずる、なぜならば、ロシア語の簡潔さと豊かさはどんな有能な翻訳家をも寄せつけぬからだ」(『イヴァン・ツルゲーネフ』)と言わせたほどなのである。しかしながら、近代化の途上にあった明治期の文学界で、二葉亭という最高の翻訳者がツルゲーネフの受容に大役を果たした。二葉亭が、「ツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻訳するにも同様に神聖でなければならぬ」(前掲)と語っていたことを思い起こしてほしい。二葉亭は、ツルゲーネフの言語芸術をうわべだけでなく、

わくは真摯な、愛すべき忠実な受け手に出会わんことを。

ロシア語の原文を自分の血肉とするほど作品に密着し、そして行間から「神聖な心持」の背後にある堅固な意思をも感じ取っていたのではあるまいか。ツルゲーネフにとって、『獵人日記』は、芸術作品であると同時に、遠方の敵と戦う武器でもあった。このように充電度の高い傑作は、翻訳者の背中を押し、傑作と呼ぶにふさわしい名訳を生んだ。さて、独歩は『武蔵野』を天職とし、全力で近代「武蔵野」宣言を成功させた。ツルゲーネフと二葉亭からの文学遺産を丹念に味読、研究の結果、自らの本領を発揮することができたのだった。

ロシア文学が言葉の違う極東の国、遠い日本でちゃんと受容され、偉業が積み上げられていく過程を、懐かしく振り返ってきた。めぐり合わせというのは、ある意味、神わざのようだ。まず、巨匠ツルゲーネフの作品の総合的な充電度、芸術性の高さが幸いしていた。しかし、——これが大問題なのだけれど——それに応じることのできる力量を備えた受け手がなくてはならない。二葉亭、独歩、それぞれの力量が受容の「近さ」を決定し、そのおかげで一般の読者も「近さ」を感じる事が可能となったのだ。作品は時空を越えて独り歩きする。願